29amM-214

日本固有民間薬オウヒ Pruni Cortex に関する考証研究

○木下　武司[1]（[1]帝京大薬）

【目的】オウヒは第 16 改正日本薬局方第１追補で初収載された。野生のサクラの樹皮を基原とするが、局方はヤマザクラとカスミザクラの２種を正品とする。漢方では十味敗毒湯と治打撲一方の２方に配合されるにすぎないが、江戸期の民間療法書に目を投じると、和方一萬方などにかなりの頻度で出現する。本品は中国で薬用記録がなく、わが国独自の生薬といってよいが、頓醫抄など江戸時代以前の和籍医書には使用例はなく、江戸時代になって発生したと推定される。本研究は生薬オウヒの発生の経緯を明らかにする目的で、和漢典籍を詳細に検討した結果、一定の知見が得られたので報告する。

【方法・結果】演者はこれまでにニガキ・センブリなどわが国固有の民間薬の発生の経緯を明らかにしてきたが、いずれもその背後に中国医学の強い影響があった。したがって中国に何らかの類品があって、それを祖薬としてオウヒが選抜された可能性もあることを示唆している。そこでオウヒの祖薬となり得る漢薬の探索を試みた。しかし、中国でサクラの同属植物の中にオウヒの類品となりそうなものは見当たらなかった。そこで江戸期の民間医療書においてオウヒを含む処方の用例を解析した結果、単味で用いる場合、癰疔や虫さされなどに用いる処方例が多いことがわかった。江戸期に流行した外科の処方で、樺皮散なる樺木皮を主薬とする処方が流行したことが用藥須知後編に記載されていることがわかり、さらに和漢三才圖會に古代から樺木をサクラの一種と認識されてきたという注目すべき記述のあることを見出した。サクラの皮は古くからカニハと呼ばれ、樺纏などに縄文時代から利用されてきた。樺の訓もサクラの古名カニハがカバと訛った結果である。オウヒの発生も中国医学と無縁ではないことが明らかになった。